

## ボルネオの日本人墓地と「死の行進」

山本 博之\*

ボルネオ研究会は、これまで日本とボルネオの関係史を中心に研究を行ってきた望月雅彦氏が、ウェブサイト (<http://www.borneo.ac/>) で研究成果を公表してきた活動を拡大し、情報や意見の交換を目的として 2001 年に発足させた研究会である。

以下では、2001 年 9 月に行われた第 1 回講演会の様子と、同年 12 月に行われた第 1 回茶話会の様子を簡単に紹介したい。

\*

### 第 1 回講演会

#### 「ボルネオ研究の視点と課題」

2001 年 9 月 22 日、講演者に上東輝夫氏(名古屋商科大学)<sup>1</sup>を迎え、法政大学(市谷キャンパス)においてボルネオ研究会の第 1 回講演会が行われた。

上東氏は総領事としてサバ州コタキナバルに駐在した経験をもつが、上東氏がサバに赴任した 1995 年の時点では、コタキナバルの領事館は世界中にある日本の外務省領事館系統の中でボルネオにだけ残された唯一の領事館であり、上東氏の在任中に総領事館に昇格した「最後の領事館」であった。このことは、ボルネオが外務省組織の中でも長年注意を引いてこなかったことを示しており、ひいては日本人一般のボルネオに対する認知度が低い

ことの象徴でもある。

さらに、赴任にあたってあいさつ回りをした上東氏は、木材・水産・石油・観光などの関連業者や旧軍人・遺族などの少数の例外を除いて、一般の日本人にはコタキナバルどころかサバ州という名前もほとんど知られていないことを知ることになる。

では、このように認知度の低いボルネオの研究にはどのような視点がありうるだろうか。上東氏はこの問いかけに対し、多文化主義、原住種族と華人、中央集権と地方分権、日本人のボルネオとの関わりの歴史、環境と観光、ODA と民間企業の進出、ボルネオ島の一体化への試みなどさまざまなテーマを挙げ、それぞれについて自身の経験をもとに解説した後、今後どのようなテーマに発展しうるかについてのアイデアを披露した。

上東氏の話題は多岐にわたったが、特に力点がおかれていたのが「墓は日本・マレーシア共有の知的財産である」ということだったように思う。日本人はもっと戦争時代の日本人の経験を知るべきだが、特に若い世代の人たちはいきなり歴史の話をされても敬遠しがちであり、その入り口としては現地にある日本人の墓を紹介するのがいい。また、戦争以前から現地に滞在して現地で斃れた日本人を含め、日本人の墓を紹介することを通じて、日本人が現地社会の建設に尽力した部分を現

<sup>1</sup> 著書に『東マレーシア概説：サバ・サラワク・ラブアン』（同文館出版、1999 年）がある。

\* 東京大学大学院総合文化研究科／教養学部。

地の人々に知ってもらいたい。この思いから、上東氏は総領事在任中から日本人墓地を積極的に調査し、その後も研究を続けている。

このメッセージを受けた形で、当時サンダカンで勤務していた方から日本占領期の様子を伺う茶話会が行われた。

＊

### 第1回茶話会

#### 「サンダカン勤務と死の行進」

2001年12月8日、元東海州庁勤務の高橋正子さんを迎えてボルネオ研究会の茶話会が行われた。

高橋さんは広島県の呉出身で、東京陸軍第一造兵廠の技術科でタイピストとして働いていた。ボルネオ守備軍（灘集団）の人員募集に応募して16歳の時にボルネオに向かい、サンダカンの東海州庁に配属された。以下は高橋さんの談話の概要である。

サンダカンは物資も豊富で過ごしやすかったが、1944年になると空襲が始まり、1945年5月27日の大空襲でサンダカンの市街が全滅した。これより先に東海岸から西海岸への移動命令が出ており、すでに東海岸のサンダカン以南で展開していた部隊がサンダカンを経由して西海岸に向かっていたが、このころからサンダカンの在留邦人もしだいに西海岸に向けて出発した。サンダカンに2000人ほどいた英豪軍の捕虜も西海岸に行軍させられたが、生き残ったのがわずか数人となり、「サンダカン死の行進」と呼ばれている。

雨季だったため、道もなく歩きにくいジャングルを雨に濡れながら歩いていった。すでに多

くの人が歩いた後からジャングルに入ったため、先に行った人たちの死骸や白骨に何度も遭遇することになった。

食べるものはほとんどなかった。朝、飯ごうに一握りの米を入れて川の水で炊き、粉醤油で色をつけてどろどろにしたものを食べた。夜は火を炊けないので何も食べずにそのまま横になって寝た。日本人でも食糧が足りないのだから、捕虜に与える食糧は当然なかった。

やがて足から下が麻痺して全然歩けなくなった。ジャングルにはみな少人数のグループで入っていたが、自分がいたグループには看護婦がいたために助けられた。そうでなければ、他の人たちと同じように歩けなくなったところで置き去りにされ、生きながらブタやトカゲに食いちぎられて死んでいったのだろう。

行軍したのは兵隊や捕虜だけでなく、民間の邦人も一緒だった。若い男性は現地で応召していたために女性や子どもたちだけ残されており、兵隊なしにサンダカンに残されたら身の安全が守れないと思ったため、兵隊と一緒に西海州に行軍するしかなかった。

身ごもってお腹が大きくなった在留邦人の女性が、別の子どもの手を引いて、夫とともにジャングルを歩いているのも見た。この女性は途中の川べりで産気づき、看護婦に取り上げてもらったが、食べものがないために赤ちゃんは生まれて2、3日で死んでいった。ほかにも行軍中に流産するなど、女性にとって大変つらい思いをした人たちがたくさんいた。一思いに死ぬならまだいいと思うほどのつらさだったが、それでも私は日本でお母さんがきっと待っていると、その思いに支えられて生き延びてきた。

しばらくしてカマンシに着き、そこで日本が負けたことが知らされた。敗戦から何週間か経ってからのことだった。そこからサンダカンに戻り、生き残った邦人が集められてゼッセルトンの収容所に送られた。

今日は奇しくも12月8日だが、56年前のこの日の開戦がなければボルネオでも他の場所でもこんな苦しい思いをした人はいなかったはずだと思うと、戦争はしてはならないと強く思う。タウやサンダカンから西海州に行軍させるという無謀な計画によって死んでいった人々は浮かべられない。こういった人々のことを若い世代に語りついで行くことが自分にとってできることであり、そうすることが死んでいった人たちへの慰霊になるのではないかと思っている。

\*

立ち上がったばかりのボルネオ研究会が今後どういった方向に進むかは未知であるが、国家の枠組みにとらわれない研究会であること、そして狭い意味の研究者だけの集まりではないことの2つがボルネオ研究会の特徴として挙げられるだろう。

ボルネオの諸地域は、小国のブルネイをのぞけば、サバ・サラワクはマレーシアの、カリマンタンはインドネシアの一部であり、しかもいずれもそれぞれの国家において周縁にあるため、マレーシア研究者やインドネシア研究者という国別の集まりの中でこれまでボルネオ研究はマイナーな話題にしかならなかった。ボルネオ研究会の発足によって、お互いに地理的に近接した領域に関心を持ちながらもこれまで接点がなかなか見つけられなかった人々が集まる場ができたのである。

また、講演会・茶話会ともに、実に幅広い層の参加者が集まり、学術的な研究とは違う形でボルネオと関わっている人が参加者のほぼ3分の1を占め、積極的な意見交換を行った。研究の蓄積が必ずしも十分でないボルネオ地域の研究を進める上で、実際にボルネオと関わる中で得てきたさまざまな経験や知識を共有するために有意義な場であった。

最後に、第1回講演会で行われたさまざまな議論のうち、ボルネオ研究会全体に関わる大きなものとして「ボルネオ」という名称に関する議論を紹介したい。

講演会では、現在の日本人には一般的にボルネオ島への関心や知識がほとんどないという側面が強調されていた。それは確かに否定できない事実だが、同時に「ボルネオ」という名前が特定のイメージとともにかなり知られているというのもまた事実である。「ボルネオ研究会」と言ったとき、「ボルネオって何？」と聞かれることはまずないだろう。つまりボルネオは、実体は知られていないが名前はよく知られている、別の言い方をすればイメージが先行しているということになる。このことを知っているからには、「ボルネオ」にどういう意味をこめて「ボルネオ研究会」を名乗るのか、ボルネオ研究会が無自覚であるわけにはいかないだろう。

これについて出席者からさまざまな意見が出されたが、結論には至らなかった。今後、ボルネオ地域の個別の研究を進めていく中で、ボルネオとは何か、そしてなぜボルネオなのかといった問いへの答えが深まっていくことになるだろう。